

金子 昭著『近代日本国家と天理教の時局対応』（法藏館、2025 年）

おやさと研究所教授  
金子 昭 Akira Kaneko

今回、自著紹介となることをお許しいただきたい。本書は、天理教教団史の解明であると共に、天理教的歴史哲学の試みでもある。本書が扱う時期は、1908（明治 41）年の一派独立の前後から 1948（昭和 23）年に天理教教典草案が公布された前後までの約 40 年間である。この時期、近代日本における国家及び国家主義に対する緊張に満ちた天理教教団の関わりが見出される。そこでは、政治的・社会的な諸局面である「時局」と天理教独自の歴史観である「時旬」とがダイナミックに交錯しているのである。

「時旬」は「おさしづ」に由来する天理教用語（教語）である。自然の作物に収穫の最適な時期（旬）があるように、出来事にはそれが生起するに相応しい時期がある。この時期は一定の年限、すなわち「時旬」が来た時なのである。この言葉は、信者個人、また教会や教団の一定の年限に敷衍して用いられる。

教団レベルで重要なのは、10 年ごとに巡ってくる教祖の年祭である。とくに戦前の時期、教祖の年祭が時代の局面（時局）と関連して語られる際、世界の動向と親神の思惑との「合図立て合い」になると称される。すなわち、世の中の大きな出来事が一つの「合図」となって、その時に親神の働きが顕現するというのである。だが、「時局」はしばしば思いがけない形で出現し、教団側の「時旬」意識と齟齬をきたすことも少なくない。

しかしながら、天理教はこの齟齬をも親神の深い思惑があると捉え直し、そのつど軌道修正を図りつつ、教団を運営していくことになる。この歴史的過程が天理教の教団史である。そして、そこに見出される「時局」と「時旬」との錯綜した関わりへの自己理解が、天理教教団の歴史認識となっていくのである。

本書では、戦前期の『みちのとも』や『天理時報』などの天理教文献のほか、当時は秘密文書として刊行された『特高月報』や『思想月報』などを精査して、明治末から大正、昭和初期にかけての激動の時代における天理教教団史が検討される。これらの文献に記録された天理教の公的な言説や実動からは、国家主義体制を生きた教団関係者の葛藤や苦悩の姿を読み取ることができるだろう。

以下、本書の概要について述べる。

序章「近代日本の時局と天理教教団」では、まず先行研究及び本書の意義とその構成が祖述される。そして、国民道徳運動（明治末期～）、国民精神作興運動（大正後期～）、国民精神総動員運動（昭和 10 年代～）という三つの国家主義的思想運動と連動した、天理教教団の「時局」への対応及び「時旬」との関連について、その概略が描かれる。

第 1 章「天理教と国民道徳運動」では、教育勅語に由来する国民道徳運動に呼応した天理教の時局対応について詳論される。とくにこの時期における『明治教典』の思想内容、また国民道徳運動との関連で重要な役割を果たした広池千九郎の活動事績の発掘が行われる。

第 2 章「天理教の“大正デモクラシー”」では、第 1 次世界

大戦後に欧米諸国から流入したデモクラシー思想の影響の下、天理教が日本精神を標榜し、国家主義的道徳を維持しつつも、さまざまな社会問題に取り組むようになった軌跡が辿られる。これにより、大正デモクラシーにおける天理教のヒューマンズムの実践の様態が検証される。

第 3 章「治安維持法体制下の天理教」では、天理教が大正末期から昭和初期にかけてどのような時局対応を行ったか、教内の各種の論説や思想について論じられる。昭和一桁の時期までは、天理教は大正以来の国民精神作興運動に乗じて、政府当局と協調姿勢を取ることができた。しかし、日中戦争以降は戦時体制となり、教団に対する締め付けが強化される。1938（昭和 13）年以降、天理教は「革新」体制を取り、国民精神総動員運動の中に呑み込まれていくのである。

第 4 章『『特高月報』『思想月報』に見る天理教』では、戦前期秘密刊行物の『特高月報』（内務省警保局）及び『思想月報』（司法省刑事局）における天理教関係の記事を紹介しながら、天理教が政府当局からいかに監視され、指導を受けていたかについて検証される。

第 5 章「戦時体制から民主体制への大転換期の中の天理教」では、太平洋戦争からその敗北、そして G H Q 支配下に至る約 10 年間を取り上げ、この激動の時代における天理教の時局対応について論述される。1945（昭和 20）年 8 月 15 日を境に日本では大きな政治的な断絶が生じたが、この断絶を跨ぐ形で大きく転換した天理教教団の状況が巨視的に考察される。

結語「時局と〈時旬〉」では、これまで論述してきた内容を振り返り、天理教の時局対応の過程を「時旬」の思想と関連させつつ、天理教の近現代史が歴史哲学的な仕方でも回顧され、総括される。

本書は昨年 2025（令和 7）年 12 月に刊行された。この年は戦後 80 年目の節目の年でもあった。そして本年 1 月 26 日には、天理教は教祖 140 年祭の「時旬」を迎えた。戦後の日本は、民主主義体制の下で平和国家として歩んできた。終戦直後の 1946（昭和 21）年の教祖 60 年祭以降、今日まで教祖の年祭を平和の裡に賑やかに執行してきた。平和な「時局」があってこそ、「時旬」を平和に迎えられる。我々は、激動の時代の天理教教団史を振り返り、そこから学んでこそ、この貴重な歴史的教訓を汲み取ることができるのである。



『近代日本国家と天理教の時局対応』  
カバー表紙